

森鷗外と町井正路：
二つの「ファウスト」、その翻訳と受容

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松木, 博 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1330

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



森鷗外と町井正路

——二つの「ファウスト」、その翻訳と受容——

松 木 博

序

大正二年、鷗外森林太郎訳の「ファウスト」は、第一部（一月十五日）と第二部（三月二十一日）に分けて出版された。それぞれ五〇七頁と七九九頁、富山房発行のこの書物の内表紙をめくると、緑色の線で囲まれた「此書は本会委員森林太郎に委嘱して翻訳せしめたるものに係る 文芸委員会」という記述が現われる。

この大著こそ、明治四十四年に発足した文芸委員会が企画した海外文学作品翻訳の最初の成果であった。委員会が委嘱してから翻訳までの経緯を、鷗外の日記から抜粋してみると以下の通りになる。

明治四十四年六月三日 午後一時始て文芸委員会を文部省新館に開く。会規則案を議す。

同 五日 午後再び文芸委員会を文部省に開く。翻訳特別委員となる。

七月三日 文芸委員会を開く。岡田委員長良平病めるをもて予その職務を代理す。Faustを訳するこ

とを囑託せらる。

十月三日 Faust 第一部訳稿を校し畢る。

四十五年一月五日 Faust を訳し畢る。

つまり、委員長代理として自らに「ファウスト」訳を委嘱した鷗外は、わずか三ヶ月で第一部、そして半年後に第二部の訳を終え、明治から大正へ移り変わる慌ただしさの中、一年半で刊行まで漕ぎ着けたことになる。公務に加えて、現代小説から歴史小説に移行してゆく創作面の活動、そして他の翻訳も発表しながらの精勤ぶりには、あらためて圧倒される思いがする。

ところで、この鷗外訳が刊行されるちょうど半年前の明治四十五年七月十五日に、もう一つの「ファウスト」がひっそりと出版されていた。東京在住の実業家町井正路が訳者兼発行者として東京堂から自費出版のかたちで上梓した「G O E T H E , S F A U S T」(背表紙の題名。表紙には「ファウスト 町井正路訳」本文三二八頁、全四二四頁)である。本稿では、この二つの翻訳について考察して行きたい。というのも、この二つは全く没交渉に出版されたわけではなく、先に出した町井は序文の中でもまもなく鷗外訳が出ることに言及している。そして後に見るように、鷗外も町井訳が刊行される前にその存在を知っていて、また「不苦心談」(大正二年九月)という自らの「ファウスト」訳出の事情について述べたエッセーでは、町井訳の内容について論じかつ評価もしている。すなわちこの二つの翻訳は、極めて異例なことに、出版される前からお互いの存在を意識しつつ出版されたのである。

前者は自ら「文学には門外漢」と序文で形容している市井の研究者であり、後者は言わば国家の事業として公的に委嘱された著名な文学者。社会状況が大きく変わりつつあった時代に、微妙に交錯した二つの「ファウスト」訳を追求することで、この時代の翻訳と受容の様態を垣間見ることが出来ればと考えている。

第一章 それぞれの契機

二つの「ファウスト」はいつ翻訳をしようと発想されたのか。まず、そこから検証してみたい。鷗外が「ファウスト」の翻訳を志した時期については、「独逸日記」によって知ることができる。明治十八年十二月、鷗外はライプチヒで井上哲次郎（号は巽軒）と会っていた。そして二人はクリスマスマス休暇にアウエルバハの酒場に連れ立って出かけている。井上哲次郎は既に、外山正一達とともに日本の近代詩のさきがけである「新体詩抄」を出しており、鷗外は自作の漢詩「盜侠行」を読んでもらうことで井上と知り合っていた。

夜井上とアウエルバハ窖 Auerbachskeller に至る。ギョオテの「ファウスト」Faust を訳するに漢詩体を以てせば如何になどと語りあひ、巽軒は終に余に勧むるにこの業を以てす。余も戯れに之を諾す。

周知の通りアウエルバハは、「ファウスト」第一部にファウストがメフィストフェレスとともに訪れた店として出てくる。たむろする酒飲みたちにメフィストフェレスが魔法で卓からワインを噴出させ、大騒動の中をファウストたち二人は酒樽に乗って飛び出して行く。鷗外は二十三歳、井上哲次郎もまだ三十歳だった。場所が場所だけに、当然二人もグラスを傾けていた。異国で学ぶ青年同士が「ファウスト」に登場する酒場で意気投合し「戯れに」交わした約束。その約束が果たされたのは、二十八年後のことである。

一方、町井正路は「ファウスト」に遭遇した経緯を序文の中で次のように記している。

想起す十七年以前、自分は東京を辞し、笈を負ふて札幌に赴き、現東北農科大学の前身たる札幌農学校に学んだ、……その当時のことである、恩師新渡戸先生の約翰 (St. John) 伝の講義を聴いたが、其の折ファウストが約翰伝を訳するといふことに就て、概略の講説をも聴くことを得た。良書に渴して居った自分の心は、這般恩師の講説に依て大に興奮し、忽ちにして「ファウスト」に引きつけられてしまったのである。(傍線引用者)

序文から十七年前は明治二十九年に当たり、町井の翻訳もそれ以来の研鑽の成果と言える。二十八年と十七年とは長短は明らかだが、ともに短い期間とは形容し難い。無論翻訳にそれだけ時間がかかったわけではないが、そうした年月を経て訳された作品だったわけである。

ところで、傍線部は町井が「ファウスト」に興味を抱いた重要な箇所だが、この記述だけでは若干わかりにくい。「約翰伝」すなわち「ヨハネ福音書」の講義の中で、なぜ「ファウスト」が話題となり、それだけ強い印象を与えたのだろうか。この点については、新渡戸稲造が明治四十三年三月に出版した『ファウスト物語』を参照することで明らかになる。第一部の書齋での場面で、ファウストは「ヨハネ福音書」の冒頭部をドイツ語に訳そうと試みる(原作の行数で第一二二〇行から一二三七行)。鷗外訳では「初にロゴスありき。詞ありき。」から「初に意ありき」、「初に力ありき。」そして「初に業ありき。」と推敲していく場面である。ここで新渡戸はこれまでの学説を詳細に検討して行く。

此一段は学者の好んで講ずる所で意味の深い所である。僕の如く哲学や神学を知らぬ輩の嘴を容れる場所ではないが、ほんのざっと述べて見よう。

(中略) 姉崎博士の説によれば此の字は仏教の所謂『法』と訳するのが一番適当らしいさうである。約翰伝を邦語に訳する時も此の語が争点となった。昔の訳言には古来神道で用いられた『言靈』と云う字を使った。今は先に云っ

た通り『道』と書いて『ことば』と仮名を付けるが、近来植村氏、内村氏等は矢張『言葉』としようと云う説なそう
だ。(傍線引用者)

仏教語や哲学の用語が使われ、同時代の姉崎嘲風そして植村正久や内村鑑三の名まで登場してくる。傍線部で「ほんのざつ
と」と書きながら、約四頁に亘って東西の哲学や神学の記述が続くのだ。既に明らかかなように、ここでの新渡戸には「ファ
ウスト」を正確に翻訳するという意図はなく、言わば大学の講義のように情熱的に問題点を解説してみせている。もちろ
ん明治二十九年の札幌で町井正路が聴いた講義がこの『ファウスト物語』(明治四十三年)そのままであったとは私も考
えていない。けれども、一文に対してこれまでの研究の蓄積を語るその新渡戸の姿勢が、知識欲に満ちた青年の心を惹き
つけたことは間違いないだろう。

第二章 町井正路について

拙稿「序を書く鷗外」(『森鷗外論集 彼より始まる』二〇〇四年七月、新典社発行)の中で、鷗外と上田敏との往復書
簡によって二人と町井訳「ファウスト」との関わりについて書いたことがある(同書百五十頁)。そうしたところ浅岡邦
雄氏より、町井正路のその他の著書についても懇切なご教示をいただいた。後に挙げるように町井には実業関係の著述が
多くあり、それ等を調べていく過程で、敢えて専門外の分野で鷗外と対峙した町井に、私はあらためて興味を持った。さ
きの論文と記述が重なる部分もあるが、その後の調査も含めてまとめておきたい。

明治四十五年五月二十七日の上田敏から鷗外宛書簡に以下の記述がある。

(前略) 新聞によればファウスト御翻訳近くに発刊の由御精励のほど驚嘆仕り候今日大学へ参り候処八九年前一度高輪仏教大学にて面会候本所北新町に目下在住の町井正路といふ人よりの来状に接し同氏が年来苦心したるファウスト翻訳へ小生の序文を徴し来るを承知仕候来書なれば本年富山房より出版の約ありし処書肆の都合にて来秋ならでは上梓致し難しとの由にて已むなく自費出版とし近く発刊のつもりと御座候御高訳も近く発刊の筈なるに重複の嫌あるのみか見本の校正刷をみるに平易なれどもかうといふ卓抜の風も無之やうなれば或は余計の業なるやも知れず直に返書して思ひ止まらせむと考へ候が既に自費をもて出版し了りたる折角の挙にも有之又同氏は今実業に従事し人造肥料会社を営み居候由にてさるかたの人にしては殊勝の催とも存候まゝ何とか其為も謀りて申越の依頼に応ず可きかと再考仕候然るに序文の内容も未だ考つかず躊躇致居そまゝに兎に角一応上記の事情御耳に入れ置かむとて(後略、傍線引用者)

上田の手紙は、一面識しかない町井に序文を依頼され、校正刷を見て鷗外と同じ「ファウスト」の訳であること、しかも出版直前であることを知り、急ぎ知らせたものであった。既に翻訳を終えて出版を控えていた鷗外にとっては、二つの意味で衝撃的な手紙であったに違いない。自らの訳より早く『ファウスト』が出版されるかも知れないこと。そして出版社が両者とも同じ富山房で、明らかに同社は鷗外の翻訳を出す為に町井の翻訳原稿の出版を延期した(あるいは慇懃に断ろうとした)と思われることである。鷗外にとっては自分の預り知らないところで町井を抑圧するかたちになっていたのだ。上田は傍線部にあるように、すぐにも出版を止めさせかねない。

たしかに鷗外側の出版の動きも既に具体化していた。上田の手紙が届く二十日前の五月八日の日記には「Faust印刷の事に就きて文部省にゆく」とあり、わずか一週間前の二十一日に「長谷川福平来て Faust 印行の事を協議す。」と富山房社員の長谷川がやって来て詰めの話をしていた状況だったのである。鷗外は二十九日に上田敏に次のように返信している。

拜啓町井氏フアウスト訳本ノ事珍ラシキ御話ニテ一寸驚候自力ニテ思ヒ立タレシコト感ズベキニ候富山房トノ關係ニ至リテハ甚ダ氣ノ毒ニ存候同店ハ文芸委員ノ肩書アル小生ノ訳ヲ出版スル為メニ町井氏ニ違約シタルヤモ不知候但シ富山房ヘハ小生ヨリモ文部省ヨリモ申込ミタルニ非ズ富山房ガ文部省ト小生トニ要求シタルモノニ候町井氏トノ交渉ガアリシ故フアウスト聞イテ文部省ヤ小生方ヘ遣ツテ来タルモノト被存可笑シク候コチラノフアウスト出版ハ富山房アマリ急ギ居ラネバ町井氏奮発セバ先鞭ヲ着ケ候コトモ出来ルカト存候貴兄ノ序文ハ是非御遣シ被成度候（後略、傍線引用者）

文学者でない町井が独力で翻訳を試みたことに感動し、文芸委員会の権威と鷗外の知名度を優先して町井訳の出版を止めた富山房の処置を「氣ノ毒」と述べ、序文を「是非」書いて遣るよう伝え、先に出版する名誉を譲ろうとまで述べている。鷗外の心遣いがうかがえる書簡と言える。ただ、同じ書簡で鷗外はこのように上田に回答を要求してもいる。

町井氏ハ第二部モ訳シタルカ如何（中略）コレマデノフアウスト訳ハ高橋五郎ノ第一部ノミカト存候大野洒竹ガドコカノ雑誌ニ第一部ノ最初ノモノロオグヲ少シ出シタルコトアリソレハ立消ニ候其他ハ新渡部（戸）ノ筋書アルノミト存候（後略）

ここで鷗外が第二部が翻訳されているかどうかを確かめていることは、私には極めて重要と思われる。記述の通り、日本の翻訳史上「ファウスト」第二部はそれまで翻訳されていなかったからである。残念ながら上田敏からの更なる返信は残されておらず、彼がどのように報告し、また行動したかはわからない。鷗外の書簡を受けてもなお町井の出版を諦めるように説得した、ということも想像出来なくはない。しかし、憶測は避けるべきだろう。私達は町井の「ファウスト」を読

むことで、上田敏がついに町井に序文を書いて与えなかったことを知ることができるのみである。

町井正路についてそれ以降に知り得たことを書いておきたい。というのも、無理も無いことだが、鷗外の研究とゲーテの「ファウスト」についての研究それぞれの領域で、町井についての記述が極めて少ないからである。^(註)

町井正路は明治十一年に、現在の秋田県鹿角市に生まれている。父勝太郎は十和田銀山に勤め、十和田湖の姫鱒養殖で名高い和井内貞行と親しかったと伝えられている。勝太郎が職場を鉾山測量から鉄道測量に転じたことで、正路は十八年一家を挙げて上京する。正路が郷土で発行されている「鹿友会誌」に寄稿した「鹿角に対する感想」に、父勝太郎について語った一文がある。「父は小坂鉾山に勤めて居た時に工部省の御雇教師であつた独逸人について教えを受けたのでコスモポリタンと云つた様な人格になつて了つたのです。」父の郷土に対する愛着が薄かつたことを謝罪する気持ちを読み取ることができるとともに「御雇教師」という語に時代が表れている。正路は約十年の東京生活の後、明治二十九年に東京府尋常中学校（現在の都立日比谷高校）を卒業。同年「ファウスト」序文にあるように札幌農学校に入学する。卒業は三十四年七月。

こうして町井の経歴をたどつてきて、私は不思議な感慨を覚える。一つは「ファウスト」翻訳の関わりで言えば、鷗外と新渡戸稲造は同じ文久二年の生まれであり、その新渡戸に導かれた町井が鷗外と同時期に翻訳したこと。そして、新渡戸と町井正路の接した時間は実は極めて貴重なものだったからである。

新渡戸稲造は知られているように札幌農学校第二期の卒業生（明治二十二年まで養家の太田姓を名のっていた為当時は太田稲造）で、明治二十年アメリカのジョン・ポプキンス大学に私費留学中に札幌農学校の助教に任ぜられ、三年間のドイツ留学（農政学研究）を命じられている。ボン大学、ベルリン大学等で研究し、二十四年に帰国して教授として勤める。特に明治二十八から九年には、農政学から英語まで十数時間を担当し、校長代理も務めていた。

ところが、『北大百年史 札幌農学校資料（二）』（一九八一年 北海道大学発行）を見ると、明治三十年九月現在の札幌

農学校職員調で新渡戸の担任(担当科目)欄には「病氣療養中授業ナシ」と書かれている。そして翌三十一年二月、校長佐藤昌介は文部大臣に宛てて「本校教授非職の件」を具申しており、新渡戸の休職が決まる。前年からの神経衰弱が治癒せずカリフォルニアに転地療養し、結局それ以後札幌農学校に戻ることはなかった。つまり、明治三十年以降に町井が入学したとしても、新渡戸の講義を聴くことはできなかったわけである。

町井正路の入学した明治二十九年、この時期の新渡戸の境遇をうかがわせる随筆が、札幌農学校から北海道大学まで学生寮であった恵迪寮(けいてきりょう)の記録『恵迪寮小史』昭和十七年十二月三十日印刷十八年一月二十日寮史編纂委員会発行)の中に残されている。

僕(引用者注 新渡戸)の舎監の時明治二十八・九年の時であったが、校長の佐藤(引用者注 佐藤昌介)が留守で自分が校長代理をして居た時分、或日の午後二時頃半鐘の音が聞こえるので近所ではあるとは思ったが(自分の家は学校のすぐ近くであったが)学校では無かったので安心して居た。しかし兎に角行って見ようと思い、出かけて行って見ると、ドヤドヤと生徒の列が表れると又憲兵が数名現れた。こんな事が二三度行われたので、之は変だと思つて近づいて見ると、果して憲兵二三人が三十人位の生徒に取り巻かれて争っていた。理由はわからなかったが自分は官憲との争いだから重大事と思い、群集の中に入り憲兵をかばった。そして前の学生達に向つて直ちに争いを止めよと叫んだ。すると草葉・山田・時任等数名の者が出て来た。(中略)争いの原因と云うのは、火事を見つけたというのが学生で、火事場へ来て学生等は消火に努めていた。そこへ警官と消防夫の本職がやって来て非常線を張った。そして生徒を邪魔物扱いにして非常線外に出そうとした。処が生徒は先に火事を見つけて消火に努めているという事を言い張つて、憲兵と言ひ争つたのである。(九十二頁 後略)

学生らしいと言ってしまうばそれまでだが、憲兵に暴行しては間違ひ無く学生が拘束される。しかし憲兵隊の司令官は、約二・三十名位の生徒が憲兵に暴行したが、教授の一人（新渡戸のこと）が身をもって憲兵をかばったという伍長の現場報告があったと述べ、新渡戸も学生も罪に問われなかった。前途ある学生の危機を救ったわけである。

校長代理まで勤めているとは言え、新渡戸はまだ三十四歳だった。体を張って憲兵と学生の間に入り学生を救った情熱は、日常の講義にも現われていたに違ひない。後の代表的な講演『衣服哲学講義』もそうだが、自らの体験に基づいた彼の講義は群を抜いた説得力を持っていた。例えば次のように。

ゲーテの『ファウスト』は二編より成るが、只だ『ファウスト』と云へば前編を指す程であって、後編は余りむずかしいので、滅多に人も読まず舞台にも登らない。又た外国語に翻訳された分も前編は多いが、後編はとも比べものにならぬ。例へば英語の訳などは前編が二十種以上もあるに、後編は三四種しかない。伯林^{ベルリン}の劇場では前編を演ずることは冬の季節盛には、甲座で無ければ、乙座ですると云ふ様に殆んど毎週二三回も出し物とするに較べて、後編は一年間に何回と云ふ位に止まる。（十四頁）

『ファウスト物語』のこの記述も、ドイツ留学中の読書や観劇の豊富な体験によって裏打ちされている。こうした新渡戸の講義に、町井は辛うじて間に合ったのだった。

第三章 翻訳の実際をめぐって

鷗外訳「ファウスト」について、小堀桂一郎は昭和五十年代になって次のように評価している（「森鷗外―文業解題翻

語学的・考証的な正確さという点に関しては爾後の日本のドイツ文学界の実力は夙に鷗外の水準を超えたであろう。しかし文章の格の高さから言えばいまだに鷗外訳を凌駕する日本語の『ファウスト』は現われていないのであって、(中略) 鷗外訳以外では、私は日本語の『ファウスト』を読み通すだけの興味を遂に持てないのである。

注目したいのは「日本語の『ファウスト』を読み通す」という言葉だ。なぜなら、第一部第二部を読み通すことが可能になったのは、鷗外訳の出現によってだからである。原典(翻訳原本)との比較については別稿で扱うこととして、まず町井と鷗外それぞれの翻訳の実際を検討してみたい。だがその前に、先行する新渡戸の『ファウスト物語』の訳文を見てみよう。ファウストが死への誘惑にかられ、毒薬を盃に注ぎ飲もうとする場面(第七二〇行から七五六行に相当)である。

棚^{たなのうえ}上なる水晶の盃を取り下して

『多年御前を忘れて居^をった。先考の存生の頃は御前は屢々酒宴で輝き、御前の美しい絵模様は屢御客の韻文の好題目となり客より客にと献酬に廻はる快樂の器であったが、吾はもはや隣席に御前を回さぬぞ。』
ファウストは瓶から褐色の毒薬を洋盃に注ぎ、悠然として口に当て、今しも飲まんとする刹那、凶らずも虚空に花ふり音楽きこえ、遠くに響く天使の合唱に耳を聳つれば

基督は甦りたまへり、

必死者(即ち人)には歓喜あれよ。

森鷗外と町井正路

(高橋五郎氏訳)

云々と復活祭の讚美歌である。ファウストは之を聞いて居る間に杯は段々唇を離れ、

『何と云ふ歌の音であらう。』

と、驚き佇む内に、がらんがらんと教会の鐘が響く。これと同時に、窓の外はぼうっと東天紅を帯び、正に夜の明けなん景色である。やがて聞ゆるは信女の合唱で、同じく基督の墓地より復活せるを詠し歌である。

嗚呼奇なる哉来り看るに、

基督は最早此に在らず。

(高橋五郎氏訳)

新渡戸は序文で「高橋五郎氏の翻訳は同氏の許諾を得て勝手に引用した。」と述べている。つまり『ファウスト物語』とは、自らの散文に他者の韻文を交えた形式を持っていた。それというのも、もともと『ファウスト物語』は著作として構想されたものではなく、明治四十一年秋、当時校長をしていた第一高等学校で生徒のために行なった連続講演の原稿がもとになっている。高橋五郎の他にも佐藤荘一郎と前田多門の訳詩が、あらずじを語る新渡戸の文章の中に織り込まれている。鷗外がさきに挙げた書簡の中で「新渡部(戸)ノ筋書」と形容したのも、翻訳から離れた姿勢を指しているとすれば、あながち酷評とは言えないだろう。

さて、町井訳はどうだろうか。同じ部分を見てみたい。

ファウスト 幾年の間忘れて居た此の水晶の盃、今こそ古い盃はこ匣から出て来てくれ、祖先の宴会に光り輝いて、手から手に巡り廻って賓客を喜ばせたのはお前だ、

盃に彫刻まれたる巧妙な肖像は、詩に歌はれ、波々と注がれた名酒は、唯一息に飲み乾されたのだ、此盃を見るにつけ、昔しの楽しかった夜が偲ばれる、併し、俺は彫刻を称讃するとて盃を出したのではない、又隣席の客に廻すでもない、この褐色の毒薬を盛る為めである、どれ満腔の渴望を以て此の盃を傾げやう、明朝の復活祭の為に祝賀の爵盃を捧げよう。

彼毒薬を盛った盃を挙げて唇に接く。

鐘の音響き合唱聞ゆ。

天使の合唱

基督は昇天し給へり。

汝地に腹這ひ、

腐敗と遺伝の欠点に、

包まれし人の子よ、

歓喜せよ。

ファウスト 噫、何たる嘲哂な歌の声ぞ、何たる清い響ぞ、合唱の声も聞いた許りで、折角取り上げた毒杯も飲み干す勇気が亡くなった、さては復活祭が始まったと見える、あの慰める様な讚美歌は、嘗つて天使の唇から、新たなる聖約の保証として、基督の墓辺に響き渡った其歌だ。

婦人の合唱

真心を彼に捧げし我々は、

香油を注ぎて彼をしも、
清きもがりに包みたり、
彼をばここに葬りぬ、
されど、ああされど、
彼は御墓にまします。

この町井訳と鷗外訳を対比してみたい。

ファウスト

さあ、水晶の浄らかな盃、ここへ降りて来い。
長い年月の間お前の事は忘れていたが、
今その箱の中から出てもらおう。

七二〇

己の先祖が祝賀の宴を張った時には、
お前は光り輝いていて、一人が一人へ差す毎に、
蹙んだ客の顔色も晴やかになったものだ。
己も若かった昔の夜のうたげを覚えている。
お前の上に美しく鑲めてある、種々の絵模様を、
飲む人の務めとして、詩の句で説き明かして
さて一口に中の酒を飲み干したものだ。

七二五

七三〇

己はお前を今日に限って隣りの客にも廻さず、
己はお前の絵模様ゑまように拙ちがい才を試みようともせぬ。
ここにあるのは早く人を酔わせる酒だ。

己がかつて選んでかつて醸した

この褐色の液がお前の中に注がれるのだ。

さあ、この最後の杯を挙げて、己は心から
はればれしく寿をこの「暁」たけまつに上るのだ。

七三五

(ファウスト杯を口に当つ。)

鐘の響、合唱の歌。

歌う天使の群

クリストはよみがえりたまひぬ。

身をも心をも損ふべき、

緩やかに利く、親譲おやゆずりの

害毒のまつはれたる、

死ぬべきもの等に喜あれ。

七四〇

ファウスト

や。己の口から杯を強いて放させたあの声は
なんと云う深いそよめき、高い音色であろう。
それにあの鈍い鐘の音は、

森鷗外と町井正路

もう復活祭の始まる時刻を知らせるのか。

七四五

さてはあの諸声は、昔冢穴の闇の夜に

天使の唇から響いて、新しき教の群に

固き基を与えた、慰藉多き詞であったか。

歌う女の群

われ等、主にまつろへる女子は

香料を

み体に塗りまつり、

臥させまつりぬ。

巾きれをもて、紐をもて

清きよらに裏うらみまつりぬ。

さるを、あなや、主の

こゝにいまさぬ。

七五五

序で述べたように、町井の「ファウスト」が出版された時点で鷗外訳は未だ出ていなかったし、町井訳が出た時点で鷗外訳は印刷所にあったから、二人は互いに参考にすることはできなかった。しかし見て分かるように、二つの訳はともに平明でしかもそれぞれに格調高い。敢えて違いを指摘するとすれば、鷗外訳は上演することを想定した「せりふ」という性格がより強く感じられ、また「ト書き」もある。さらに原作の行数の表記を添えていることにも注目したい。一万二千百十一行ある原文と全く同じ行数で翻訳する姿勢が、そこに明らかに見てとれる。そのことも与って、鷗外以降の翻訳では、

多くがその形式（行数表記）を踏襲していくことになった。但し、ここで詳述する紙幅はないが、「文づかひ」や「即興詩人」などにも使われた「冢穴（つかあな）」（七四六行）という語は、町井が当てた「墓辺」という語の持つ普遍性に及ばないのではないかと思われる。

結 翻訳の方向性をめぐって

町井正路の序には、「ファウスト」訳の系譜と評価について述べた部分がある。彼がなぜ困難な訳出を試みたかが理解できるので、ここで検討してみたい。

既往に於て現われた「ファウスト」の邦語訳は、先輩高橋五郎氏の手になったのと、我が新渡戸先生の分とであるが、先生のは其の題号の示す如く「ファウスト物語」として平易にかつ面白く「ファウスト」の内容を紹介せられたので、何人も興味を以て読むことが出来るのであるが、高橋氏訳の分は原書と同じく頗るむづかしいもので、素人には到底難解たるを免かれぬ、聞く処によれば又文芸委員会の事業として、近い内に鷗外森博士の訳も現われるそうであるが、これは又其の道のオーソリチーたる博士のことであるから、充分に読書を満足せしむることは勿論であろうと思われるが、併し云う迄も無くそれは韻文であろうし、又専門的であつて、素人に対しては矢張り難解であろうと思われるのである。

之を要するに、今日の趨勢より見て、「ファウスト」の読者―渴仰者は今後益々増加するであろう、増加すると共に彼等の最も必要を感じるものは「散文」邦語訳の「ファウスト」であろう、彼等が独逸原書に拠つて「ファウスト」を読まんとする時、其の座右に散文邦語訳を置くの必要を切実に感ずるであろうことは、自分が十余年の経験に依つて推定する処である。

町井が自らの「ファウスト」訳に求めていた機能、そして用途はここに既に明らかだと思われる。すなわち単独で読まれることを期待するのではなく、あくまで原文でゲーテの「ファウスト」を読もうと考えた人が参考にするための参考書としてだった。初心の読者は、このように読み取って良いのか、それとも違うのかと迷う。自身の体験があるからこそ想定出来る読者の迷いや悩み。その時指針となる「座右の書」が町井の目標であった。

さらにこの記述から、町井が二系統に「ファウスト」訳を分けることに気が付く。呼称に注目するなら「先輩高橋五郎氏」「鷗外森博士」に対して「我が新渡戸先生」。難解で「素人」には不向きな高橋五郎訳と（韻文で専門的で難解であろう）鷗外訳に対して、誰でも容易に理解できる（紹介としての）新渡戸の物語と、これから評価を世に問う自分の散文訳である。読者の側に寄り添おうとする意図が鮮明にされている。

しかし、鷗外の訳は町井が考えるような難解さは少なかった。その背景には文芸委員会よりも早く「ファウスト」翻訳を委嘱した井上哲次郎の存在を考慮するべきである。

巽軒杯を挙げて余に属して曰く。「ファウスト」の両篇、之を訳して日本に伝ふべきもの君に非ずして誰ぞ。僕東に帰らむ日には団十菊五の徒が君が「ファウスト」を新富部に演ずるを観んと。（演劇場裏の詩人）明治二十三年二月）

酔余のことには違いないが、鷗外は第一部第二部を上演できる形で翻訳するように委嘱されていた。町井の考えた二系統は上演を想定して翻訳した鷗外によって一つにまとめられたことになる。

鷗外は翻訳の苦勞話を求められ「不苦心談」を書き、そこで先行した二人の翻訳を読んで「高橋君の努力をも町井君の努力をも十分に認めている」と記す一方で「どちらも第一部だけである。」とも書いている。事実その通りで、全訳の功

續は言うまでもなく鷗外のものであらう。

しかし、町井の翻訳にも作品全体を知るための配慮があることも記しておきたい。序で挙げたように、町井の「ファウスト」は第一部訳の本文が三一八頁であるのに、全体としては四二四頁のボリュームがある。百頁以上も訳以外の部分があるのだ。この中に三五頁にわたる「ファウスト後編梗概」がある。例えばファウストの死の場面はこのように書かれている。

(前略) 余は過ぎ行く『瞬間』に向ひて『汝の容貌の美しさよ、しばし止まりて余に示せ』と呼ばんと欲する、此の世に於ける余が生涯の事蹟は万世不朽である、あゝ斯の如く祝福の向上したる時に際し、最高度の『瞬間』を味ひ得たる嬉しさよ」と。

ファウストは大地に倒れる、レミユレス走り寄って抱き起こしたか、早や既に此の世の人ではなかった。之れを見たメフィストは曰く「如何なる快樂も彼に満足を与へず、如何なる幸福も彼に満足を与へなかつた、追求又追及、追及は彼が唯一の業務であつた、而して彼の最後の追及は最悪のものである、憫むべし、彼は空虚なる『瞬間時』を獲得せんと欲して倒る、如何に優勢なりとは云へ、此のメフィストと對抗して何の成就する処があるうか。約束履行の時には到達した、老ひたる彼の屍は塵の中に横たはって居る、時計は音なくして黙然たりだ。」

合唱「然り、黙然たり、静寂なること深夜の如し、時計の指針は落ちたるよ」。

梗概といいながら、これはもはや部分訳と形容してもいいのではないか。限定されてはいるものの、町井は読者に第一部第二部を通した作品を伝えようとしていたわけである。この町井訳によって、ファウストの生涯が日本語で完結したと言つてよいだらう。

最後に受容の様態についても記しておきたい。鷗外訳は大正二年当時で二円の価格でありながら三月廿二日初版、四月八日には五版が出ている。大変な売れ行きで、鷗外も「世間の誅求が急」とまで表現している。実際その通りだったのだろうが、こうした事情は鷗外訳についてだけではなかった。

新渡戸稲造の『ファウスト物語』（一円七十銭）も明治四十三年三月七日印刷、三月十二日発行で四月五日に三版であり、同年十一月五日には早くも七版が出されている。町井訳『ファウスト』（一円）も四十五年七月十日印刷、七月十五日発行で翌年大正二年四月十日には再版されている。「ファウスト」という人物・物語の魅力がこうした需要を生み出していたと思われ、日本語においても様々なテキストで広く読み継がれて行ったのである。

注 町井正路については、早く星野慎一『ゲーテと鷗外』（潮選書 一九七五年十一月発行）が秋田出身であることなど簡潔に紹介している（一〇四頁）。またウェブ上の「鹿角の森」で桜井守宏氏、宮澤義臣氏、稲村光郎氏の調査・記述を参考にさせていただいた。ここに記して感謝したい。また「都市計画と汚物処理」をはじめとする著述については、国立国会図書館の蔵書による。なお、未見の著作もあり、調査を続けている。御教示いただければ幸いです。